

渡米エッセイ

遠野醸造取締役
一般社団法人NextCommonsLab理事
田村淳一

私にとっては初めてのアメリカだった。アメリカどこか、海外に行った経験も数回しか無く、違う国の農村地帯では何が行われているのか知りたいという期待があった。日本における地域での取り組みについての情報は入ってくるが、海外のそのような情報はほとんど知らない。私は岩手県遠野市という人口28000人の地域に暮らし、地域の課題を解決する起業家の誘致、育成を行っている。都市部から起業家人材の流入をどのように促し、そしてどのように彼ら彼女たちを育成し、地域に影響を与えていけるのかが興味のある点であり、そのヒントを見つけたくてプログラムに参加した。



アメリカでは複数の地域や団体を巡り、活動を紹介していただいたり、自分たちの地域での活動と重ねながら議論をした。当初の期待通り、組織のつくり方や広げた方、取り組んでいる人のマインドや視点など、参考になる点が多かった。今回の訪問では、この参考になったということ以外にも大事な気づきがあった。それは、地域で活動している人材に類似性があるということ、課題に対するアプローチ方法に違いがあった、ということだ。



人材の類似性については、アメリカで出会った起業家たちに親近感を覚えたということである。同じような現場や課題に向き合い、試行錯誤し、悩むことや嬉しさを覚えることが近いということから感じたことなのだと思う。日本で活動していても、同じように地域で活動するプレイヤーとは、初めて会った方でも親近感や連帯感のようなものを感じる。それをアメリカの地方の起業家たちにも感じた。一見当たり前のようなことなのかもしれないが、違う国で活動している仲間が増えたことが単純に嬉しかった。

課題は似ているがアプローチの方法が違う、というのがもう一つの大事な気づきである。全てが違っていただけではないが、例えば、日本でいうと都市部に働く人が地元ではない地方に移住する施策が多いのに対し、アメリカでは都市部に出てしまった地元出身者をいかに地元に戻ってきてもらうか、という施策の話が多かった。いわゆるIターンとUターンの

違いである。アメリカのUターン施策は進化しており、地元出身者がどこで暮らして仕事をしているかを調べるサーベイツールがあったり、出身者に対し地元に戻る事を促すアプリケーションがあるなど、日本では聞かないような取り組みがあった。それらは自身の団体の取り組みにおいても参考にしたい話だった。

反対に、日本でのUターンの施策はアメリカ側に新しいアプローチ方法を伝えられるものでもあると思う。地元出身者でないことで、地域の資源や課題の捉え方が変わってくることもあるだろうし、地元のしがらみがないからこそ突破できるものもあると思う。私自身の活動で、地域に誘致している起業家人材のほとんどは地元出身者ではないが、地域に今までにない新しい風を吹き込んでいる。地域がうまく活性化して新しい創造にチャレンジするには、地元出身者とそうではない人たちの両方の流入を促して多様性をもっていくことが大事だと思っている。そういった人材の流入を促すには、地域の魅力を発信するだけでなく、自己実現や挑戦ができる新たなプロジェクトを地域の資源や課題から見つけ出し可視化することが必要で、その手法は私たちから伝えられることだと思う。

今年の春、嬉しい出来事があった。今回のアメリカ訪問で出会ったネブラスカ州ライオンズで活動するジェイミー・ホーターというアーティストが私の住んでいる地域にはるばる来てくれた。私たちの活動を現場でぜひ見たいということで、地域の現場を巡って活動を紹介した。また、彼女がライオンズでおこなっている[プロジェクト](#)を、私の地域でもぜひやってみたいという思いがあり、興味がある地域の起業家を繋ぎ、どのようにそのプロジェクトを進めているのか議論の場を設けた。すぐには実現するものではないが、遠隔でもコミュニケーションを取りながら、プロジェクトを実現させたいと考えている。



日本とアメリカを比べれば、歴史的背景も違い、都市部と地方の地理的環境も違うなど、多くの違いはあるが、課題が同じなのであれば互いに参考にできる部分や協働できる部分は間違いなくあると思う。同じ課題に向き合う仲間意識を持ち、互いに学びあい、実践までもっていくことで新たなものが生み出されるはずである。最初から上手くいくものばかりではないが、継続的なコミュニケーションでチューニングもできる。今回のプログラムにおいては、秋のアメリカ側の参加者の日本訪問後、どのように進めていくのかが重要にはなるが、こういった意識を大事にして取り組んでいきたい。